

キャベツ (アブラナ科)

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
タネまき	植えつけ	収穫									
春まき											
			夏まき								
						秋まき					

品 種

- 〔春まき〕 中早生3号、青空、大空、四季穫
 〔夏まき〕 早生秋宝、大御所、四季穫、冬王
 〔秋まき〕 金系201、金系Y R 21、春福、南風

栽 培 ポ イ ン ト

●栽培時期● 品種を選べば、1年じゅう栽培できるようになりましたが、本来は冷涼な気候を好みます。寒さにはかなり強い反面、暑さには弱いので、一般に秋まき栽培が家庭菜園向きです。

しかし、秋まきはとう立ちの心配があります。キャベツは、一定の大きさの苗が一定期間、10度以下の低温にあうと、生長点に花芽ができて、それ以後は葉ができません。そして翌春、日が長くなると、とう立ちしてしまいます。

とう立ちを避けるには、タネまきは9月中旬～10月上旬ごろ行います。あわてて早まきすると、苗が大きくなりすぎるためにとう立ちしやすく、反対におそまきすると、外葉が十分育たないので、小球しかできません。

夏まきは、とう立ちの心配はありませんが、育苗期が真夏のため、苗が病気で腐ったり、軟弱になったりしますので、風通しのよい涼しい場所を選んで育てるようにします。

●土作り● 土への適応性は広く、酸性土にも強いのですが、水はけの悪い畑では根腐れが起きやすくなります。肥沃で、保水、排水のよい土で作りましょう。

●管理● タネは、床まきや箱まきとし、本葉2～3枚のころ鉢上げして、植えつけ苗に育て、畑に植えます。夏まきは35日育苗で5～6枚葉、秋まきは40～45日育苗で7～8枚葉が目安です。

鉢上げの際は、深植えをすると、生育がかなり遅れるので注意します。

夏の育苗は、植え傷みのないように、活着するまで寒冷紗をかけますが、その後は、陽光を直接当て、がっちりした苗に育てます。鉢上げ苗は乾きやすくなるので注意しますが、水をやりすぎて軟弱にさせないよう気をつけます。

植えつける畑は、日当たりのよい場所を選びます。しかし、たとえ日当たりがよくても、アブラナ科の野菜に、根こぶ病などの連作障害が出ている畑には、3～4年作らないようにします。苗は、鉢上げのときと同様に深植えにならないように植え、たっぷり水やりをして、植え傷みを防ぎます。

よく結球させるためには、結球が始まる前までに十分に外葉を作ることがポイントですから、追肥、中耕、土寄せは、重要となります。

秋まきは、元肥えが効いていれば年内の追肥は控えて、翌春の3月上旬ごろに化成肥料を1株に1握りずつ施して、土寄せをします。年内に8～10枚葉までにして越冬させましょう。

夏まきは、植えつけ後急速に生長しますから、結球が始まるころまでに、化成肥料を1株につき軽く1握りずつ、2回施します。最初は、植えつけ後20日、2回目はさらに20日後に施し、結球が始まるころまでに、追肥を終わらせるようにします。追肥のつど、土寄せも行ってください。

●収穫● かたく結球したものから順次切りとります。夏まきは畑にわりあい長期間おけますが、秋まきは、収穫が遅れると裂球してしまいます。植えつけから収穫までの期間は、品種によって違います。

栄 養

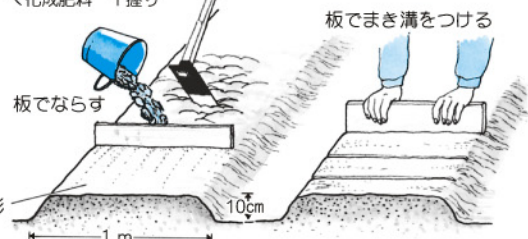
栄養価は高く、特にビタミンCやカルシウムを多量に含んでいます。また、ビタミンUが含まれていて生汁は胃腸障害に効果があります。

1 苗床作り

日当たりがよく、風通しのよい場所に苗床を作る。床には全面に苦土石灰を1握り(1㎡あたり)と、元肥えをまいてよく耕し、表面を板でならす。床はバスアミド微粒剤で消毒すると立ち枯れ病を予防できる。

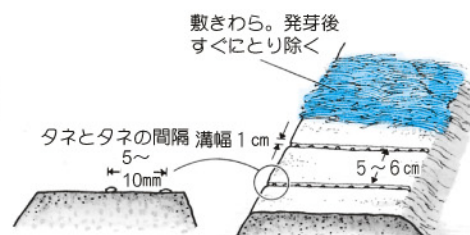
夏は床面をかまぼこ形にすると排水がよい

元肥え(1㎡あたり)
 (完熟堆肥 バケツ1/2杯
 化成肥料 1握り)



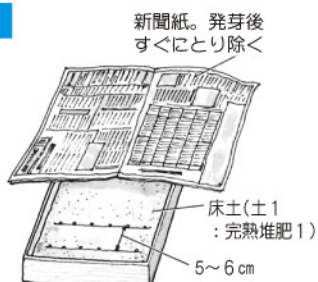
2 タネまき

5～6cm間隔にまき溝をつけ、あらくタネをまく。タネが隠れる程度に水をやり、乾燥するようなら敷きわらをする。3～5日で発芽する。



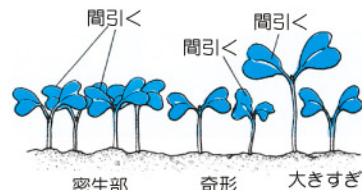
3 箱まき

作る苗が少ない場合や、夏まきの場合は、用土を箱に入れ、床まきと同じようにタネをまく。水やりをして、発芽まで新聞紙をかけて乾燥を防ぐ。水量が多いと立ち枯れ病が発生しやすい。



4 間引き

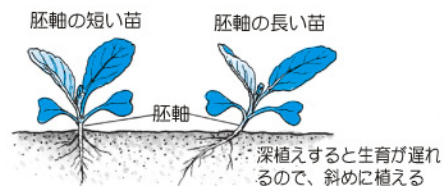
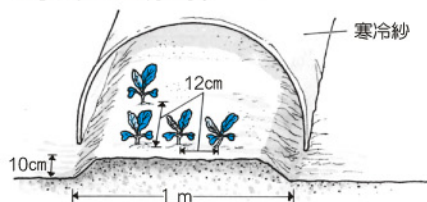
床まきも、箱まきも、子葉が開いて本葉が見え始めたところに、密生部と、子葉が奇形な苗、異常に大きすぎる苗などを間引く。



5 仮植

○床に移植する方法

まき床と同じように肥料を施して仮植床を作る。苗が本葉2枚ぐらいのころ、仮植床に12cm間隔で植え、たっぷり水をやる。根づくまで寒冷紗をかけるが活着後はとり除き、がっちりした苗に育てる。



○鉢上げする方法

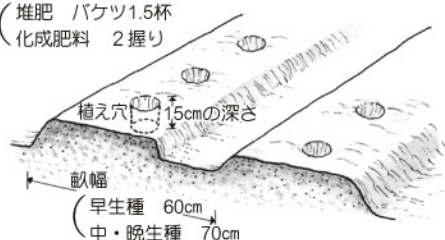
仮植のかわりにポリ鉢に植えると、本畑に植えつけたときの植え傷みが少なくてすむ。植え方は床に仮植するのと同様に行う。



6 畝作り

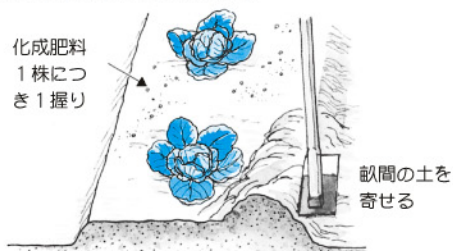
畑にはあらかじめ1㎡あたり2握りの苦土石灰を施して、よく耕しておき、植えつけ1週間前に、元肥えを全面にまいて土をよく混ぜ、畝を作る。

元肥え (1㎡あたり)
堆肥 バケツ1.5杯
化成肥料 2握り



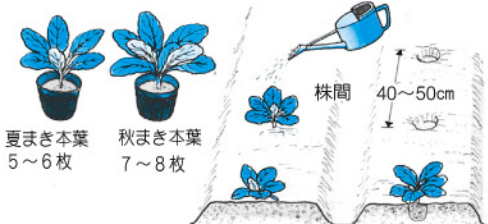
8 追肥・土寄せ

秋まきは、北風に飛ばされないように、年内はしっかりと土寄せだけを行う。翌春3月ごろ畝間に追肥し、土寄せする。夏まきは、植えつけ後20日間隔を目安に、結球が始まるまでに2回ぐらい追肥を施す。



7 植えつけ

植えつけは、風のない暖かな日を選ぶ。植えつけ前に、苗床あるいは苗鉢に十分に水をやり、水が引いてから苗を掘る。植えつけ後は十分に水をやる。

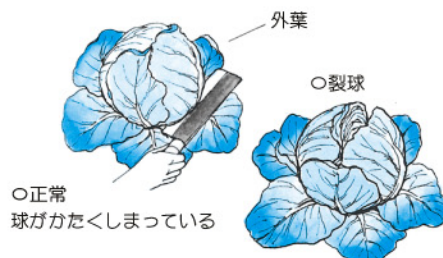


9 収穫

結球して、球がかたくなったものから、早めに収穫する。春どりは収穫が遅れると、球が割れるので注意する。

主な病害虫

◆病気 ベと病、黒斑病、軟腐病
◆害虫 アオムシ、アブラムシ、ヨトウムシ、ハスモンヨトウ



○とう立ち

結球していても、先がとがり、収穫すると軽いのは、球内とう立ちをしている。これは、やがて裂球して収穫できなくなるので、早めに収穫したほうがよい。

